推定無罪

下

スコット・トゥロー
上田公子 訳

PRESUMED INNOCENT

A NOVEL BY
SCOTT TUROW

文春文庫

PRESUMED INNOCENT
by Scott Turow
Copyright © 1987 by Scott Turow
Japanese language paperback rights reserved by Bungeishunju Ltd.
by arrangement with Brandt & Brandt Literary Agents Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

文春文庫

推定無罪 下

定価はカバーに
表示してあります

1991年2月10日　第1刷
1991年5月30日　第3刷
著　者　スコット・トゥロー
訳　者　上田公子
発行者　豊田健次
発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-752708-1

文春文庫

江苏工业学院图书馆
藏书章

推定無罪

下

スコット・トゥロー

上田公子訳

文藝春秋

推定無罪　下

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

冒頭陳述
春
夏（24章まで上巻）
秋 287
最終弁論 347
訳者あとがき 353

推定無罪　下

主な登場人物

ロザート・K・サビッチ……キンドル郡地方検事局首席検事補
この小説の語り手　通称ラスティ

バーバラ……サビッチの妻

レイモンド・ホーガン……地方検事

ニコ・デラ・ガーディア……検事補

トミー・モルト……検事補

リディア・マクドゥガル……検事補　通称マック

タツオ・クマガイ……監察医　通称ペインレス

ダン・リップランザー……市警殺人課刑事

ラレン・リトル……判事

アレハンドロ・スターン……弁護士　通称サンディ

クェンティン・ケンプ……弁護士　通称ジェイミー

夏

（承前）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

25

午前三時。目がさめると、心臓は高鳴り、冷や汗が首すじを流れていて、夢うつつで愚かしくもカラーをゆるめようとしている。身を起こして手さぐりし、またベッドに倒れこむ。呼吸は荒く、心臓の鼓動が枕に押しつけているほうの耳のなかで間欠的にとどろく。夢はまだなまなましい。苦悶にあえぐ母の顔。臨終の迫った、あの骸骨のように痩せさらばえた顔、そのうえもっと悪いことに、もう物言えぬ母の、どうしようもない恐怖の表情。

母は病気になるとまもなく死んだのだが、晩年の母は成人以来はじめての平和な日々を過ごしていた。相変わらず店では父と肩を並べて働いていたけれど、もう一緒には住んでいなかった。父は家を出て、ミセス・ボーヴァという未亡人と同棲していたのである。その女が、まだ夫の死なないうちから店へ来て図々しい態度をとっていたのを、いまでも覚えている。母にとって、父との生活は恐怖に支配されたものだったから、このとりきめはいわば一種の解放だった。外の世界に対する興味が突如として激増し、そのころ始まった電話による聴取者参加ラジ

オ番組の最初の常連の一人になったのである。異人種間の男女交際をどう思いますか？　マリファナの合法化は？　ケネディ殺しの犯人については？　母は食堂のテーブルに古い新聞や雑誌を積み上げ、メモ用紙や索引カードに自分の意見を書いて、翌日の番組に備えた。自宅のアパートの建物と店の範囲から外に出るのに病的恐怖を感じていた母、午後に外出する用事があるときは早朝からその準備を始めなければならず、自分が家を離れなくてもいいようにわたしが八歳になるのを待ちかねてマーケットへ使いに出した母――その母が、この世のさまざまな問題に対する歯に衣きせない意見によって、地元の有名人になったのだ。彼女の人なみはずれたエキセントリックな面や彼女のそれまでの生活のせまさを受け入れるために自分を合わせ、ずっと以前からそれに適応してしまっていたわたしは、この突然の変化になかなかついていけなかった。

ユダヤ系の組合運動の闘士とアイルランドのコーク出身の女性を両親に、六番めの娘として生まれた母は、二十八歳のとき、四つ年下の父と結婚した。父が結婚したのは、母が持っていた貯金のためだと、わたしは確信している。その金で父は店を開くことができたのだ。母のほうにも、父を愛して一緒になったと思わせるものは何一つなかった。オールド・ミスで、それにたぶん、あまりにも風変わりだったから父以外にはだれも求婚しなかったのだろう。わたしが見てきた母のふるまいには、極端で制御しがたい傾向があり、ばら色の歓喜の絶頂から何時間もの鬱状態へと病的な変化をくりかえすのだった。ときには、狂乱状態になり、かん高い興奮した声で何やらしゃべりながら走りまわって、ドレッサーの引出しにつめこんだ物をひっぱ

り出し、裁縫箱のなかをかきまわす。本人がめったに家から出ないので、母の姉たちが妹の様子を見にやってくるのが習慣になっていた。これは勇気のいる行為だった。彼女たちが来ると、父はいつも、この世話やきばばあ奴らが、と大声の独り言で攻撃し、また、たまたま酔っぱらっているときに来たりすると、実際に暴力で脅すことも辞さなかった。それにもめげず、いちばんよく訪ねてきた二人、フロー伯母とセーラ伯母は、どちらも父親ゆずりの気丈な女性で、まるで吼えたてる野良犬に立ち向かうような厳しいひとにらみと恐れを知らぬ態度で、うちの父をよくコントロールしていた。弱き者――ロージー（わたしの母）と、とくにわたし――を護るという口には出さぬ使命に燃えていたのだ。わたしの子供時代を通じて、この伯母たちが親鳥のような存在だった。キャンディをみやげに持ってきてくれ、床屋に連れていってくれ、服を買ってくれた。そういう世話のしかたがすっかり日常化してしまっていたので、わたしははたち過ぎるまでは彼女たちの意図――親切心というか――を意識していなかった。だが、自分でもわからぬうちに何となく、この世には二つの世界があることに気づいていた。母の住む世界と、伯母たちの住む世界。そして、自分もまた、後者に属していることを次第にさとるようになったのである。自分の母親が、当時のわたしの表現によれば、常人ではなく、母への敬慕の念が、他人には理解できず自分でも説明不可能な純粋に個人的なものであるという認識、それがいわば恒星のように、わたしの青年期の宇宙のなかで、つねに同じ位置を占めつづけていた。

もし母がいま生きていたらどう思うか、わたしはそれにこだわっているのだろうか？　たぶ

んそうだろう。子供ならそう考えないはずがない。母がいまの状態を見るほど長生きしなかったことを感謝したいほどだ。最後の二、三か月、母はわたしたちのところで暮していた。そのころ、われわれはまだ市内の、寝室が一つしかないアパートに住んでいたのだが、バーバラがどうしてもひきとると言ってきかなかったのだ。母は居間のソファベッドで寝(やす)み、昼間もそこから起き上がることはめったになかった。バーバラは、ベッドのそばに引き寄せた堅い木の椅子に、ほとんどいつも坐っていた。最終期には、母はたえずバーバラにしゃべりかけていた。頭を枕にうずめ、病いに痛ましくもやつれた顔で、光の弱った目の焦点をかろうじて合わせて話しつづけた。バーバラは母の手を握り、二人はささやきを交わす。内容を聞きとることはできなかったが、そのつぶやき声は、蛇口から漏れる水滴の音のようにいつも聞こえていた。かたや洗練された郊外族の有閑マダムを母親に持つバーバラ・バーンスタイン、かたやうつろう心と幼児のようにあどけない気質の持主であるわたしの母、その二人がたがいに孤独の海峡を越えて心を通わせ合っているというのに、わたし自身は、個人的な哀しみにとらわれて何のアプローチもできず、戸口に立って眺めるだけだった。バーバラにとって、相手はうるさく要求しない母親、うちの母にとってバーバラは自分を無視しない子供だったのだ。ときどきわたしがバーバラと交替すると、母はわたしの手を握る。わたしは人なみに、愛してるよ母さん、としばしば言ったものだ。母は弱々しくほほえんだが、めったにしゃべらなかった。臨終近くに、鎮痛剤を注射したのもバーバラだった。そのときの注射器は、いまだに母の奇妙な形見の品々とともに、箱に入れて階下に置いてある。古い糸巻や索引カード、例のラジオ番組のためのメ

モを書くのに使った金ペンつきの万年筆などを、バーバラはまだ捨てずにちゃんととっているのだ。

暗い寝室のなかを歩きまわって部屋ばきをみつけ、クローゼットからガウンを出してはおると、居間のロッキングチェアに腰をおろし、足も上げてうずくまる。最近またたばこを吸うことを考えるようになった。たばこ自体が吸いたいのではなく、目ざめていることの多い夜中のみじめな時間に、何でもいいからやることが欲しいのだ。

いまわたしが一人でやっているのは、〝最悪の部分は何か？〟というゲームだ。そう考えると、じつに多くのことがとるに足らぬように見えてくる。村を歩いているとき、女性たちがわたしを見てハッと息をのむのも、もう気にならなくなった。世間の評判も心配せず、また、たとえあす告訴が取り下げになったとしても、これから一生、わたしの名前を聞いただけで反射的に身をすくませる人が多いだろうという事実も気にならない。無罪になったとしても、法律家としての仕事をみつけるのは容易ではないだろうが、それも問題ではない。だが、着実に進行する情緒不安定、不眠、病的な不安、これは無視も軽視もできない。最悪なのは、こうして夜半に目ざめて、自己をコントロールするまでの瞬間、この恐怖がけっして終わらないことを確信する瞬間だ。闇のなかでスイッチを手さぐりで求めるのに似ているが、ただ違うのは――そしてここで恐怖がその頂点に達する――スイッチがかならずみつかるという自信がまったくないことだ。この手さぐりの時間が次第に長びくにつれ、わたしをかろうじて支えている力が少しずつ衰え、水に落ちた錠剤のように泡をたてて溶けていく。そして永遠に続く無限のパニ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com